

令和元年6月7日現在

機関番号：32404

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2014～2018

課題番号：26870476

研究課題名（和文）中国ドキュメンタリー映画批評の空間およびネットワークの構築

研究課題名（英文）Building the space and network of Chinese documentary film critique

研究代表者

佐藤 賢 (SATO, Ken)

明海大学・外国語学部・講師

研究者番号：50726487

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,000,000円

研究成果の概要（和文）：中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画について、従来の研究成果を整理・総括することと関係者に対するインタビューを行なうことなどによって、作品だけにとらわれない、映画を経験的に考察する批評の可能性を提示すると同時に、そうした可能性を共有する映画制作者と研究者のネットワークを構築することを試みた。それにより、中国と日本において、映像をとらえて中国を理解することの問題と可能性を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

中国におけるインディペンデント・ドキュメンタリー映画が、人的ネットワークに支えられ、美学的位相においては中国現代詩と親和性を持つことを明らかにした点、およびドキュメンタリー映画について、作品だけを理論的に分析する方法でなく、実制作者の制作過程や観衆の受容のあり方など映画をめぐる経験に寄り添った内面的な考察の方法を提示したという点に学術的意義がある。中国において独立した表現活動を支える人的ネットワークの構築に参加している点、および中国ドキュメンタリー映画の考察が中国を認識するその過程自体を省察する機会となる点に社会的意義がある。

研究成果の概要（英文）：The survey attempted to present the possibility of critiques to review movies based on practical experience, not limited to the contents alone. At the same time, it tried to establish a network of filmmakers and researchers who shared such possibilities. For this purpose, the authors sorted out and summarized previous research results on independent Chinese documentary films and interviewed some related people. In this process, we highlighted several issues and options of China and Japan understanding China through images and scenes.

研究分野：中国映画、文学研究

キーワード：中国ドキュメンタリー 中国映画 中国独立映画 ドキュメンタリー映画 中国現代詩

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

(1) 中国では1990年代後半以降、小型のデジタルビデオカメラを使用した、ドキュメンタリー映画の制作が盛んであり、そうした個人制作によるインディペンデント・ドキュメンタリー映画は、変化する中国社会の現在をアクチュアルに映し出しているように思えた。

(2) 一般の映画館では上映されることのないインディペンデント・ドキュメンタリー映画が自主上映されている空間では、映画を「見る」こと自体が問われているように思えた。

(3) 自主上映会や比較的規模の大きな上映イベントに参加すると、インディペンデント・ドキュメンタリー映画が個人と個人の関係に基づく人的ネットワークに支えられているように思えた。

(4) 中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画の制作は、1980年代の終わりから1990年代にかけて始まったが、そこに1980年代の詩運動との関係性が見いだせるように思えた。

### 2. 研究の目的

中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画の実制作者と研究者が、建設的な相互批判をおこなうことが可能な批評空間をつくり出し、中国ドキュメンタリー映画批評・研究のネットワークを構築することを目的とする。

(1) 従来の研究成果を整理・総括するとともに、関係者にインタビューを行なうことをとおして、映画作品を理論的に分析する方法だけでなく、実制作者の制作過程に寄り添った内面的な考察の方法を模索する。

(2) (1)で提起した試みを共有する研究者、関係者のネットワークを構築する。

(3) (1)と(2)により、中国、日本において、映像をとおして中国を理解することの問題と可能性を明らかにする。

### 3. 研究の方法

(1) 中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画研究に関する日本語の文献には、林旭東「中国大陸におけるドキュメンタリー」(Documentary Box#26、2005)があったが、日本の研究者による総論的な研究はなかった。中国語圏においては、映画制作者へのインタビュー集である台湾の王慰慈による『記録與探索 與大陸紀錄片工作者的世紀對話』(遠流出版、2000)を嚆矢として、80年代の終わりから90年代にかけて始まった中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画という新しい動きに対して、「新記録運動」と明確に定義づけをおこなった中国の呂新雨による『紀錄中国 当代中国新紀錄運動』(北京三聯書店、2003)などがあつた。また、崔衛平の「中国大陸独立製作紀錄片的生長空間」(『二十一世紀』第77期、2003)は、中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画と中国現代詩の関係性に言及するなど啓発的な考察を含むものであつた。本研究は、以上のような従来の研究成果を整理・総括しながら、中国においてインディペンデント・ドキュメンタリー映画などの独立的な表現活動を支えているかに見える人的ネットワークや、ドキュメンタリーと現代詩の関係性、そしてドキュメンタリー映画を視聴する場の問題などの側面から、再度中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画の歴史を振り返ると同時に、近年の新しい動きについて考察を加えるという方法をとつた。

(2) 本研究においては、作品分析を考察の中心にせず、ドキュメンタリーを制作することや見ることが、映画制作者をはじめ当事者たちにとって、何であつたのかという「経験」を考察するため、当事者の証言、つまりインタビューを主な考察の対象の一つとした。これまでに王慰慈の『記録與探索 與大陸紀錄片工作者的世紀對話』や呂新雨の『紀錄中国 当代中国新紀錄運動』をはじめ、朱靖江・梅冰の『中国独立紀錄片档案』(陝西師範大学出版社、2004)、朱日坤・万小剛主編『独立紀錄 對話中国新銳導演』(中国民族摄影芸術出版社、2005)、李幸・劉曉茜・汪繼芳『被遺忘的影像』(中国社会科学出版社、2006)などのような書籍として刊行されているインタビュー集があり、それらを利用して当事者の「経験」を考察した。加えて、中国での研究調査や日本で開催されている山形国際ドキュメンタリー映画祭などを利用してインタビューをおこなつた。

(3) ドキュメンタリー映画「Village People Radio Show」上映会&討論会(於マレーシア、2014)、ドキュメンタリー映画「異境の中の故郷」上映会&トークショー(於首都大学東京、2015)、ドキュメンタリー映画「星火」上映会&討論会(於専修大学、2016)、ドキュメンタリー映画「アプダ」上映会(於明海大学、2019)、国際ワークショップ「中国ドキュメンタリー映画の歴史と現在」(於明海大学、2019)などの開催・参加をとおして、インディペンデント・ドキュメンタリー映画について討議を重ね考察を深めた。

#### 4. 研究成果

(1) 中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画の歴史は、1990年に制作された呉文光の『流浪北京』に始まるとされるが、本研究は、呉文光が大学生時代に文学サークルに属す大学生詩人であり、同じサークルにのちに「第三代詩」という詩潮流を代表する詩人となる于堅も属して文学活動をおこなっていたことに注目した。そして、呉文光が『流浪北京』を制作した当時は、映像制作資源へのアクセスが限られており、撮影機材の貸し借りや編集設備の提供など、個人と個人の関係性がドキュメンタリー映画制作を支えていたが、そうした人的ネットワークが表現活動をおこなう上で重要であるという状況は、呉文光や于堅が参与した1980年代に大学生を中心に展開した詩運動にも見られたことを明らかにした。

(2) 先行研究が明らかにしているように、1990年代の中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画の表現スタイルは、既存の記録映像において映像がナレーションに対して従属であることへの対立面に成立したが、それはナレーション＝言葉からの独立であった。その際、制作者の意図やメッセージを排し、観察者に徹するダイレクト・シネマ的手法が有効であり多用された。本研究は、そうした文脈において、老女の語り＝言葉だけをダイレクト・シネマ的手法で記録し、逆に言葉に還元し尽せない中国の複雑な歴史記憶をめぐる独創的な時間と空間を立ち上げさせた王兵の『鳳鳴』を中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画の一つの到達点であると位置づけ、さらに、映像をメッセージ＝言葉に還元せず、多様な世界を多様なものとして見せようとする王兵の表現スタイルを、近年「音」の位相でとらえ直そうとする朱声平（『また一年』）のような映画作家が存在することも明らかにした。

(3) 既存の映画制作体制からの独立とともに、「言葉」からの独立という問題意識を有して、1990年代に中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画が現れたことは、1980年代の啓蒙思潮が、実際にはそれが批判、克服しようとした「革命」と同様に「大きな物語」に過ぎなかったという問題が1990年代以降に顕在化するプロセスと符合している。本研究は、中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画の歴史の記述が、革命神話の解体から啓蒙へ、そして啓蒙批判から多元性へという現代中国の思想的な変遷の記述でもあることを明らかにした。その際、「言葉」からの独立という問題意識を考える上で、詩表現の独立を、外部のいかなる大きな存在にも依拠しない表現のあり方であるとする于堅の詩論が代表する1980年代の詩潮流が先駆的かつ啓発的であることも明らかにした。

(4) 2000年代以降の中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画制作の活況の背景には、小型のデジタルビデオカメラの普及とともに、中国各地にシネクラブが組織され「映画を見る運動」が展開したことがあった。本研究は、この「映画を見る運動」に着目し、映画を作ることに加えて、「見る」ことにおいても困難が強られる中国においては、逆説的に「見る」ことが積極的な意味をもつ可能性が開かれることについて考察し、「見る」ことが映画を「作る」ことの跳躍台になっていたこと、「映画を見る運動」が人的ネットワークによって支えられていたこと、さらにそうした「見る」ことと「作る」ことが接近する状況が、大学生を中心に詩運動が展開した1980年代においては「読む」ことと「書く」ことの接近というかたちで現れており、中国においてドキュメンタリーと詩が親和的な関係性をもつことを明らかにした。

(5) 中国の雲南地方においては、映像を制作者の成果物として外部に持ち出すのではなく、それを再び撮影場所の人々に返すことを重視し、山村に住む少数民族の村人たちへビデオカメラを渡し、映像撮影をおこなってもらい、映像素材を共同で編集し作品を完成させ、それを村において上映する参加型映像教育の試みが、郭浄を中心に展開された。本研究は、雲南におけるドキュメンタリー映画運動をとおして、「作品」だけに還元されない、「経験」を重視した映画のあり方について考察し、それがドキュメンタリー映画の可能性の一つであることを明らかにし、映画をめぐる経験に寄り添った内在的な批評の可能性を提示するとともに、新しい批評の空間をつくり出すことを試みた。さらに、ダイレクト・シネマ的手法でドキュメンタリー映画制作をおこなっている葉雲（『見つめる』）、朱声平（『また一年』）、章夢奇（『自画像：47KMに生まれて』）などの若い世代の映画作家にも、参加型映像教育に参与した経験が見られることを明らかにした。

(6) 中国インディペンデント・ドキュメンタリー映画を支えてきた人的ネットワークを維持・発展させる上で、北京、南京、雲南などで開催されていた比較的規模の大きいインディペンデント・ドキュメンタリー映画の上映イベントは重要な役割を果たしてきたが、習近平政権が発足した2012年前後から、そうした上映イベントの開催は困難になってしまい、人的ネットワークにとって大きな打撃となった。ただ、一部の映画制作者や批評家・研究者たちは、ドキュメンタリーにおける経験を重んじるようなワークショップの開催や編集を持ち回りで担当する電子版のドキュメンタリー映画批評誌の発行などをとおして、人的ネットワークを維持するとともに、実制作者と研究者が相互批判をおこなうことが可能な批評空間をつくり出そうと模索していることが明らかになった。

## 5 . 主な発表論文等

### 〔雑誌論文〕(計1件)

佐藤 賢、平凡社、詩人于堅における詩とドキュメンタリー、明海大学外国語学部論集、査読有、第29集、2017、pp . 71 - 82

### 〔図書〕(計3件)

佐藤 賢、平凡社、中国ドキュメンタリー映画論、2019、344

佐藤 賢 他、東方書店、国際未来社会を中国から考える、2018、pp . 33 - 44

佐藤 賢 他、筑摩書房、現代中国入門、2017、pp . 94 - 110

### 〔その他〕(計10件)

佐藤 賢、雲南におけるドキュメンタリーの可能性、東亜、Vol.622、2019、pp . 78 - 79

佐藤 賢、流れる女とグローバル化時代の中国 賈樟柯の映画『江湖儿女』、東亜、Vol.619、2019、pp . 82 - 83

佐藤 賢、「80後」監督の独立ドキュメンタリー、東亜、Vol.616、2018、pp . 74 - 75

佐藤 賢、フレーム外に広がる音の豊かさ 『また一年』、neoneo、Vol.11、2018、pp . 124 - 125

佐藤 賢、中国独立ドキュメンタリーの「独立」とは何か 呉文光から王兵へ、東亜、Vol.613、2018、pp . 70 - 71

佐藤 賢、流れゆく人々を映し出す『苦い銭』、東亜、Vol.610、2018、pp . 78 - 79

佐藤 賢、中国独立ドキュメンタリー映画を思い起す、東亜、Vol.607、2018、pp . 74 - 75

佐藤 賢、映像から見た中国、中国を理解する、2016、pp . 143 - 154

佐藤 賢、香港の60年代 映画『ワイルド・ブリッド』に見る文革の影、中国60年代と世界、Vol.4、2015、pp . 4 - 8

佐藤 賢、解題、現代思想、42巻8号、2014、pp . 141 - 143

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。